

～ AI@Work 2025キックオフ ～

Researching methodology to make AI projects
successes from multiple angles

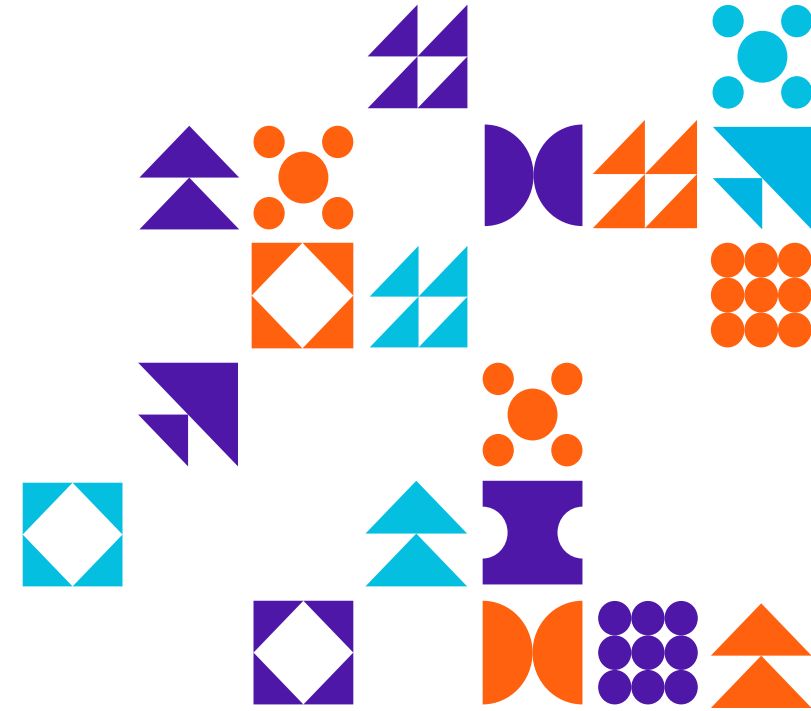
WG1 2024年活動成果 と 2025年計画

～ AIプロジェクトを多面的な観点で成功に導く ～

Jan.19, 2025

AI@Work コミュニティ・WG1

AI@Work Community of Practice, WG1



WG1が考える AI-Driven時代の Project Managers のイメージ



2024年までのWG1 活動の成果

WG1 : PM4AI (Project Management for Artificial Intelligence)

AI導入プロジェクトを成功させるための手法を多面的に研究

2024年は、テーマ別に5つのグループで研究活動を実施した



2024年

リーダー： 岡元 大輔
サブリーダー：小山 恵一郎

2025年

リーダー： 小林 功
サブリーダー：小山 恵一郎

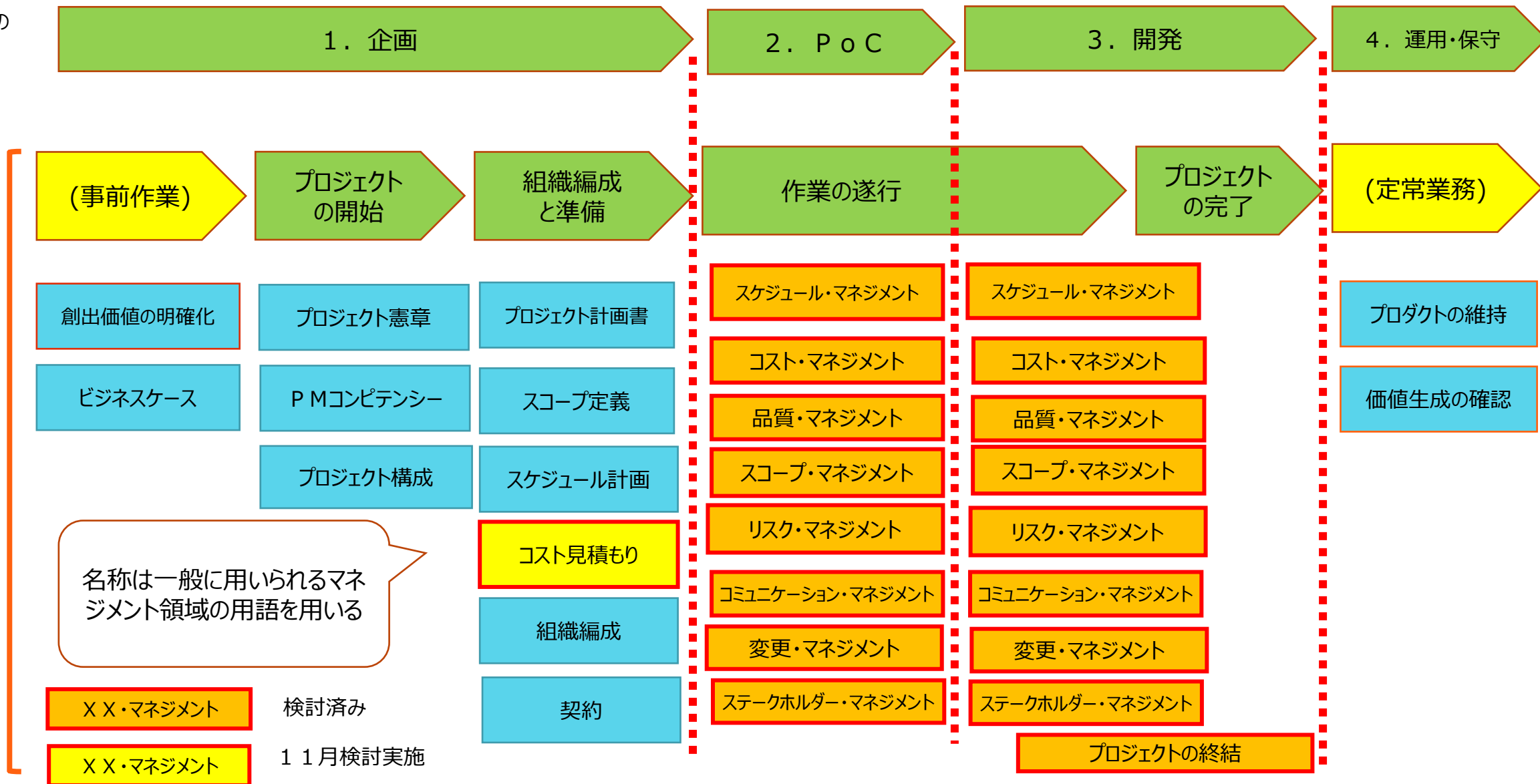
グループ名	グループリーダー
D0 : AIプロジェクトの進め方	小林 功
D1 : 実用化～実用化後の課題	和田 安有夢
D3 : AIプロジェクト特有のリスク	西山 淳
D4 : 機械学習の品質マネジメント	佐藤 朋信
E5 : AI PMBOK (AIプロジェクト知識の体系化)	岡元 大輔

以下の報告は活動成果抜粋

AI PMBOK（AIプロジェクト知識の体系化）を目指す

成果物
プロセスの
フェーズ

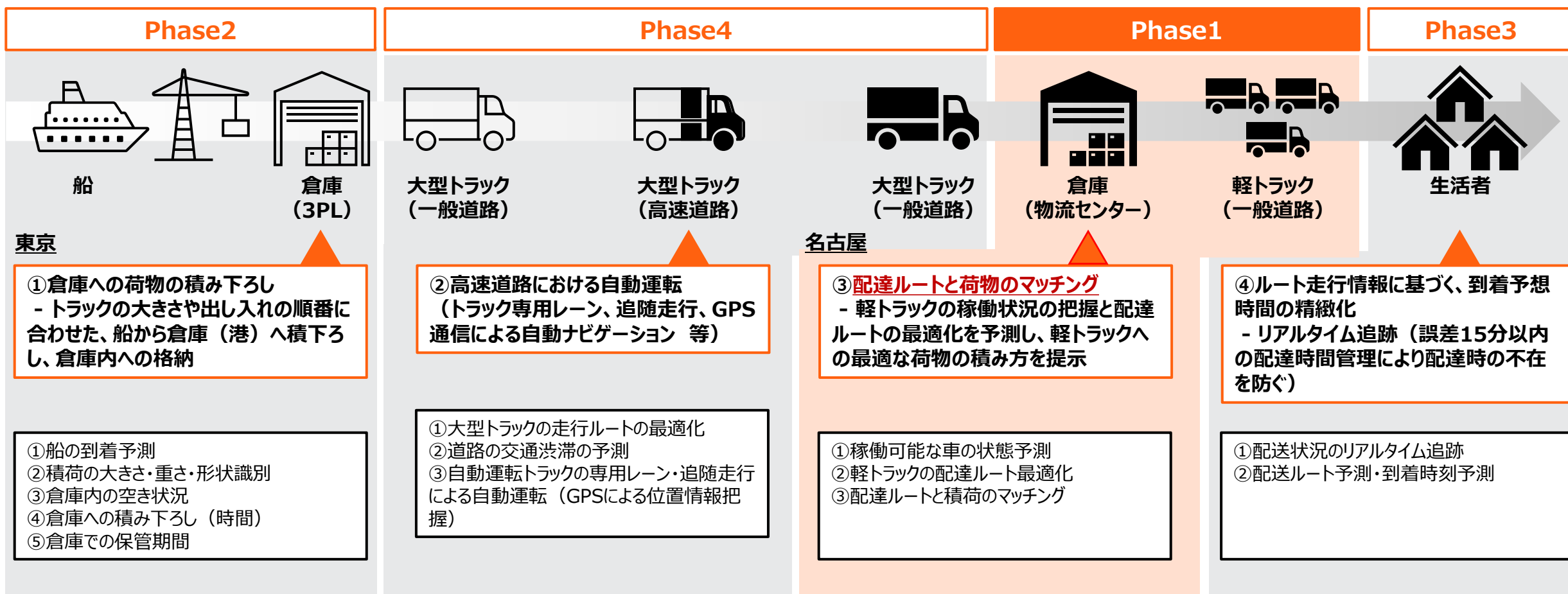
プロジェクトマネジメント要素



EC事業の運輸業務へのAI適用を仮想プロジェクトで想定

将来的には、幹線輸送の自動運転化を目指しつつも、倉庫での仕分けや、生活者の受取り時間の改善を目指し、Phase1ではラストマイル輸送の効率化に向けた、ピックアップ拠点での幹線輸送車からの荷下しと、ラストマイル輸送車への荷積における最適な荷物とトラックのマッチングにAIを活用するプロジェクトを設定した。

生成AIによる
PJ計画の出力Try



AIガバナンス・リスク・品質のフレームワークを研究

合わせて各種品質データを基に、機械学習・生成AIツールで評価を試行

AIマネジメントの国際規格
ISO/IEC 42001

AIガバナンスの国際規格
ISO/IEC 38507

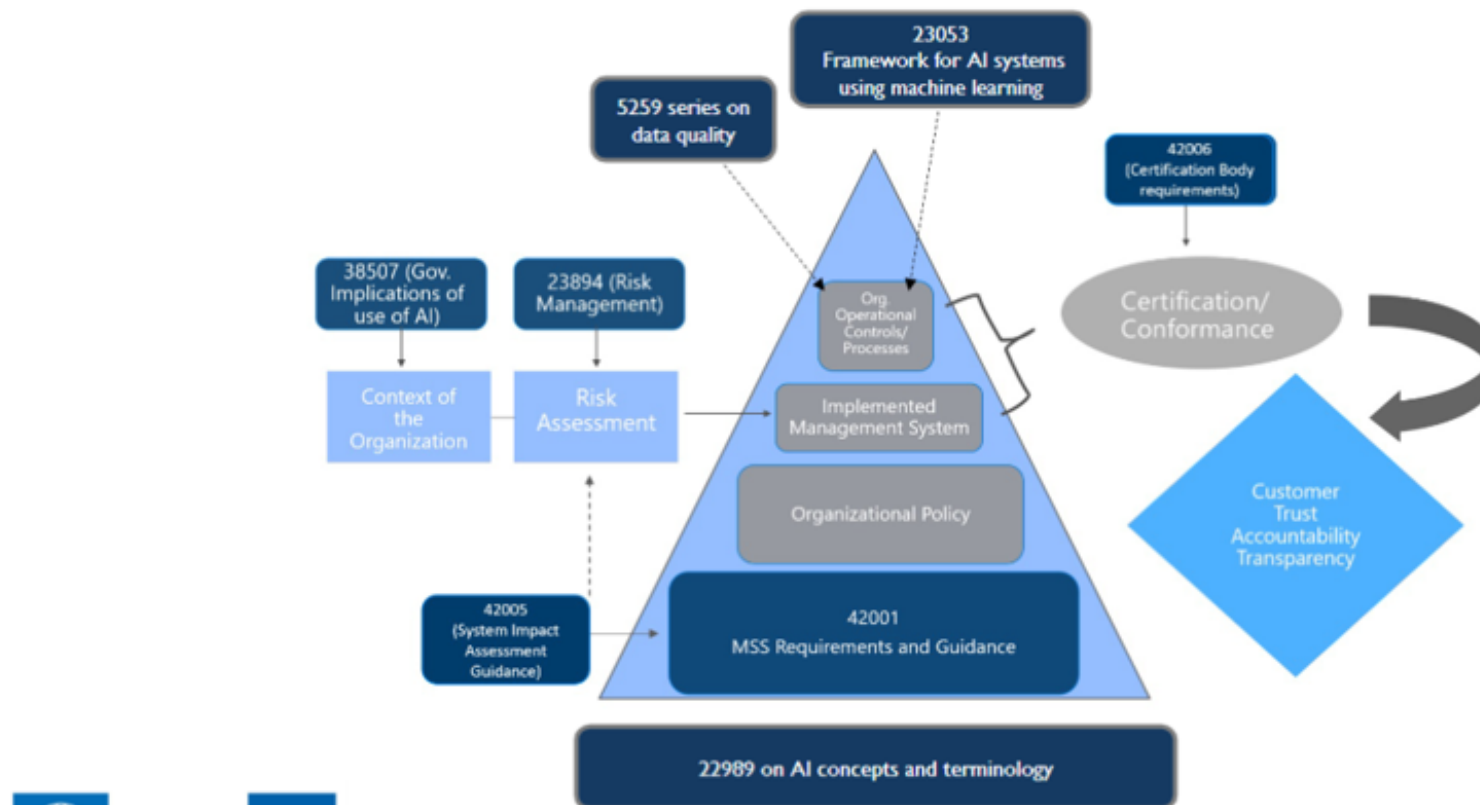
NIST/
AIリスクマネジメント
フレームワーク (AI RMF)

EU-ACT

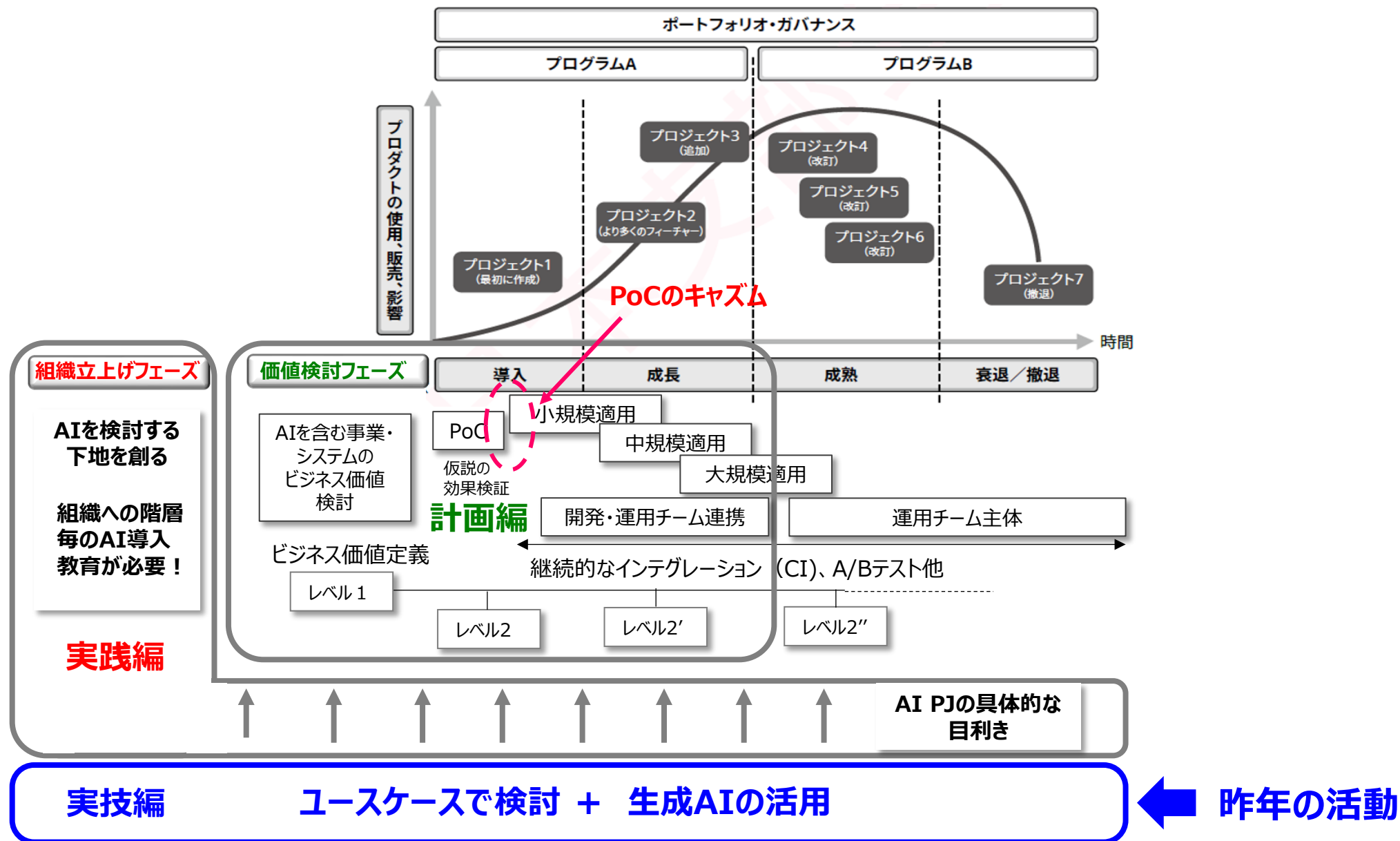
Disciplined Agile
(要求仕様の調整)

総務省・経済産業省「AI事業者ガイドライン」

Other supporting standards in the foundational ecosystem



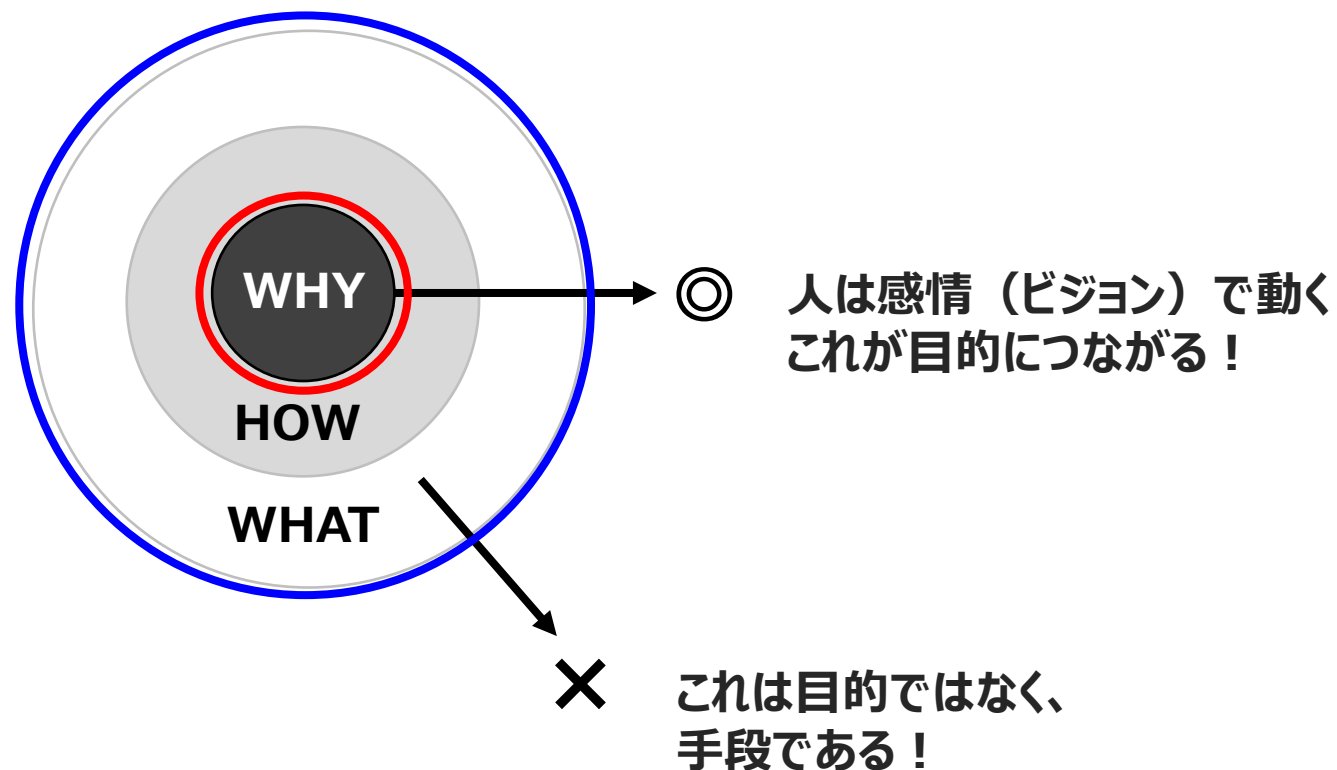
D0チーム：AI導入プロジェクトから価値を引き出す手法を研究





なぜから始めよう | サイモン・シネック | TEDxPugetSound

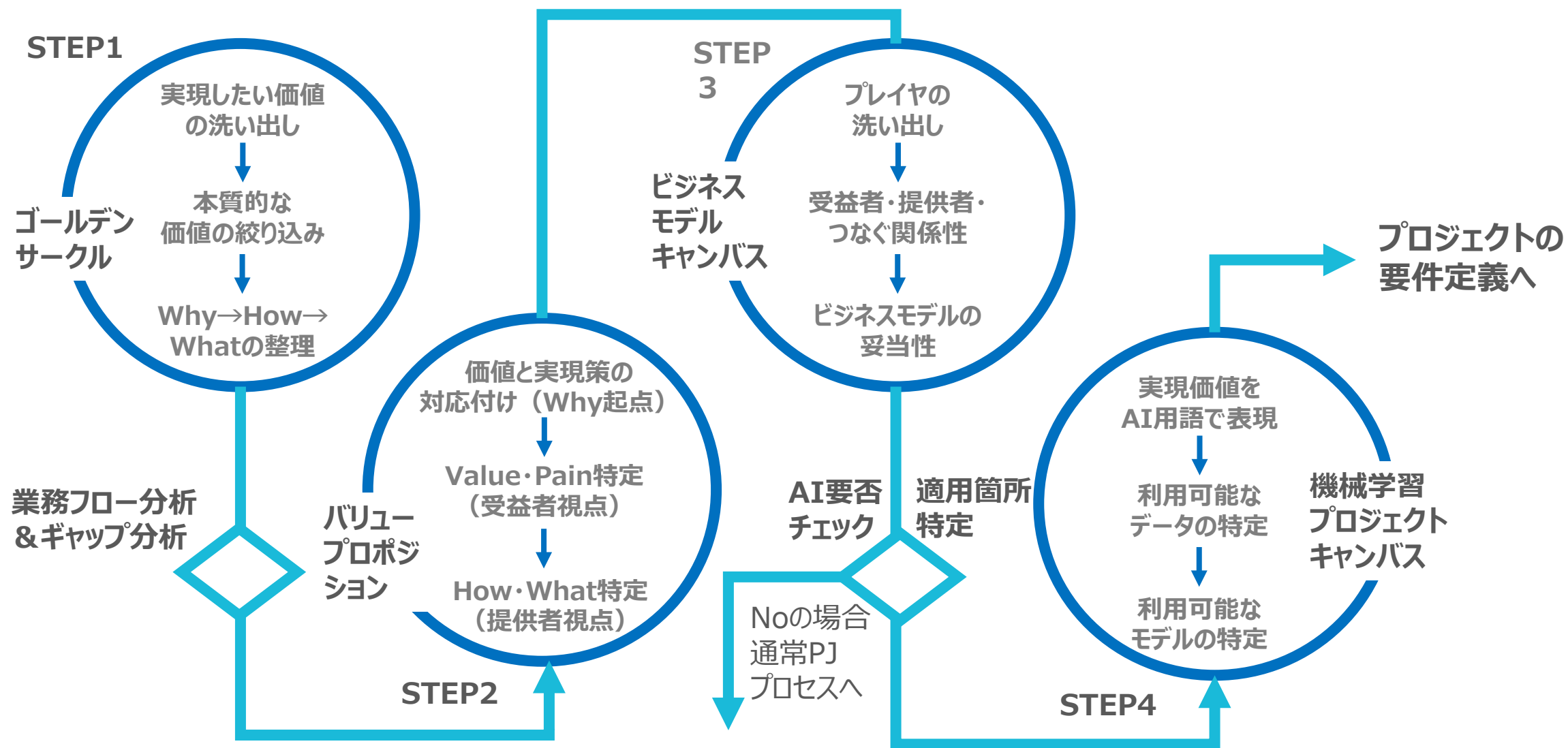
https://www.youtube.com/watch?v=u4ZoJKF_VuA



これをプロジェクトの最後まで一貫して問い続けること、見直していくことで最終的な価値が得られる！

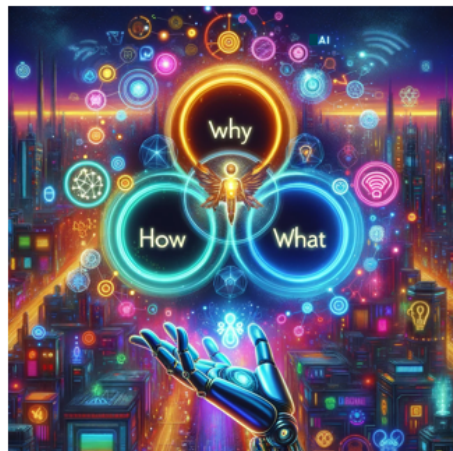
価値検討フェーズのフロー

✓ プロジェクトをスタートする前に、本質的な価値と実現手段を検討



1

プロジェクトマネジャーのための価値検討フェーズの進め方



■プロジェクトマネジャーにとって、ゴールデン・サークルと呼ばれるWHY⇒HOW⇒WHATの順に考える習慣は、物事を判断する上でとても重要です。

■プロジェクトの成功 = 求める価値を実現することだと定義すると、枝葉や手段に囚われずWHY = 価値にフォーカスして検討をするといでしょう。

■PMIグローバルによると、約70%のプロジェクトは求めた価値を実現出来ず失敗に終わっています。

■多くの失敗は、『AIを目的にする』などで、HOWやWHATからスタートしていることに起因します。

■『価値検討フェーズ』は、本質的な価値を見出し、そこから実現手段を具体化させて、プロジェクトを成功に導きます。

※ DALL-E3で生成したAIが価値を実現するシナリオをデザインしたイメージ
AI@Work Community of Practice, PMI Japan 2024 - Copyright and all rights reserved.

3

プロジェクトマネジャーのためのRAGの活用



■RAGは「Retrieval Augmented Generation」の略で、情報検索と生成AIを統合し、必要な文脈に応じた高精度の情報提供を行う技術です。

■RAGは情報生成の前に関連データを検索し利用するため、ハルシネーションなどの不正確な情報生成を抑え、信頼性の高い回答が得られます。

■RAGを活用することで、プロジェクト管理上のノウハウを効率的に再活用出来ます。

■例えば成功事例、失敗事例、リスク管理戦略、ステークホルダーとのコミュニケーション方法、進捗管理のテクニック、変更管理のプロセスなど。

■RAGのワークフローを活用することで、プロジェクトの提案から具体化して、評価、フィードバックまで、システムティックなフローを構築出来ます。

※ DALL-E3で生成したプロジェクトマネージャがRAGを活用するイメージ
AI@Work Community of Practice, PMI Japan 2024 - Copyright and all rights reserved.

2

プロジェクトマネジャーのためのPrompt Engineeringの奨め



■生成AIにより、プロジェクト企画・計画・実行にあたって有用な情報をInteractiveに取得することが可能です。

■その際に生成AIに対するINPUTとOUTPUTは会話形式で行うことが出来ます。そして生成AIからの精度の高い、かつ求める回答を引き出すためには、「Prompt Engineering」の知識が必須です。

■生成AIも人間と同じく、目的、ペルソナ（回答者の位置付け）、必要かつ明確なINPUT情報、制約条件等を、生成AIが理解できるように設定することで、所望の回答が得られます。

■これはAIとヒトとの対話を『ヒューマンインザループ』で実施することに繋がります。

※ DALL-E3で生成したデザインを元に一部修正したイメージ
AI@Work Community of Practice, PMI Japan 2024 - Copyright and all rights reserved.

4

VS Code + Claude Devで生成AIによるWEBアプリを自動生成



■生成AIによるアプリのノーコードによる自動生成の進化には激しいものがあります。

■ついにPromptにより、様々なWebアプリを自動生成する実効的な仕組みが、VS Codeの拡張機能で、Claude Devを利用することで可能になって来ました。

■VS Code + Claude Devの組合せで、その破壊的な効果を確認することが可能です。

■我々は、この仕組みをPM手法のAI-Drivenによる一つの解法として検討を進めます。

■DifyなどのRAGのワークフローと組合せることで、経験知を蓄積しながら、WEB I/FでPJを効率化する仕組み作りを狙います。

※ DALL-E3で生成したClaude Devによるアプリ自動生成のイメージ
AI@Work Community of Practice, PMI Japan 2024 - Copyright and all rights reserved.

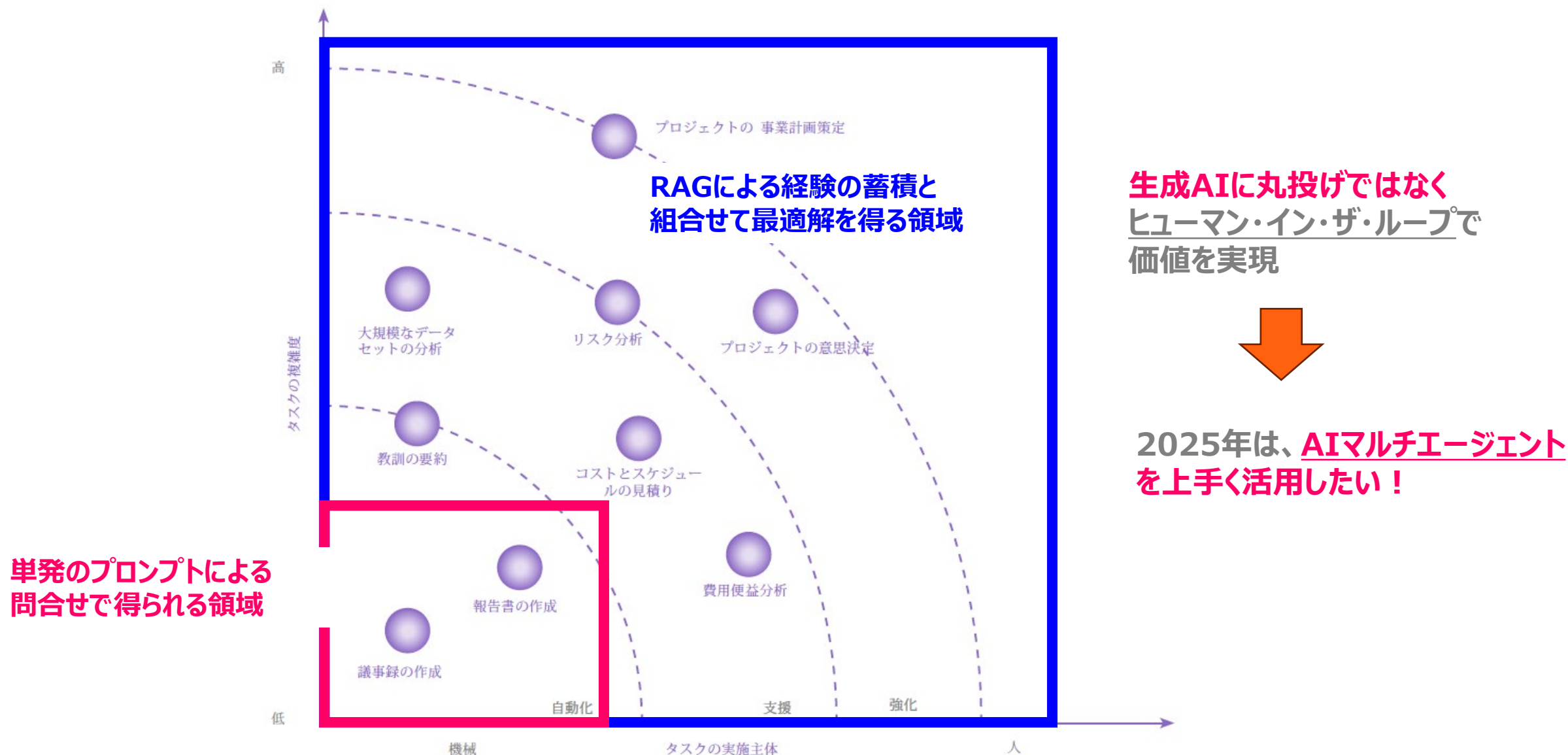
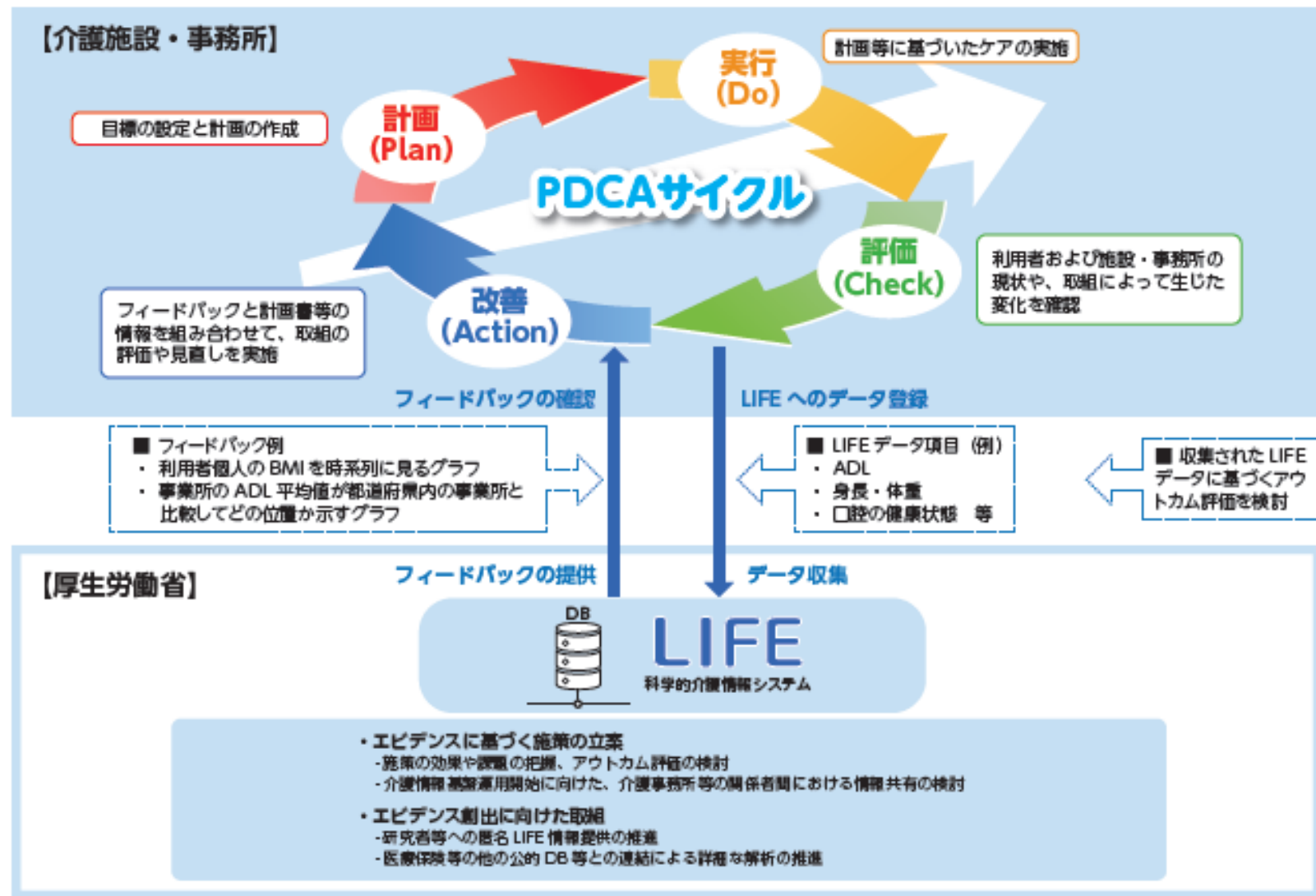


図1: 生成AIで自動化、支援、強化できるプロジェクトマネジメントタスクの例

<LIFE：科学的介護情報システムの概要>

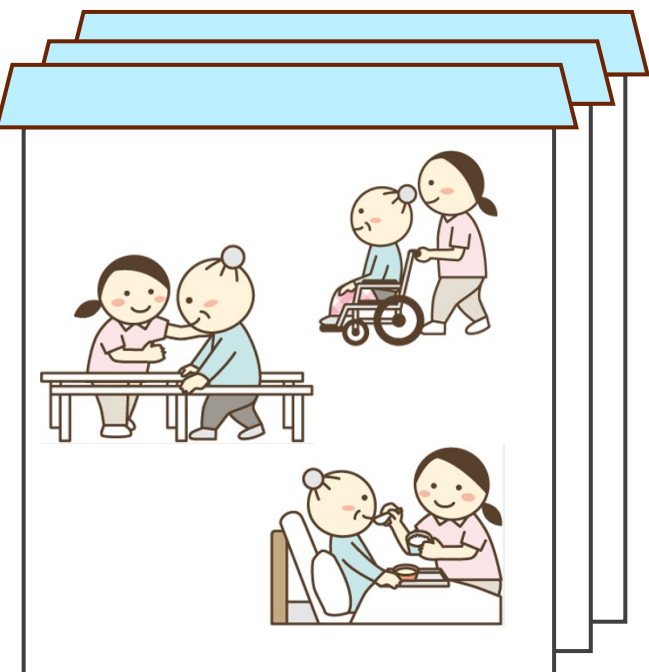


※LIFE：厚生労働省が令和3年から導入した科学的介護情報システム。自立支援・重度化防止のために、効果がか科学的に裏付けられた介護実現するため、必要なデータを収集・分析するためのデータベースを活用する。

民間の介護ケア事業者と厚生労働省で双方向でデータを集積・利活用する仕組み。

LIFE適用により**介護報酬が加算**になる。

今回のLIFE対応企業のプロジェクトでLIFEを拡張するイメージ（仮）



50人規模収容×10か所
(PJ・マネジメントが行える程度の規模)

×

ジムやヘルスケアサービス企業と
コラボ
(健常者も未病の段階から利用)

今回の発表の検討には含めない

<従来のLIFEによるサポート>

スタッフによる人手の観測記録がメイン

ADL／BI 生活自立度

- ✓ 食事・移動・トイレ・歩行
- ✓ 階段昇降・着替え
- ✓ 排便コントロール
- ✓ 排尿コントロール

DBD13 認知症進行度合い

- ✓ 物事に関心示さない
- ✓ 徘徊・言い掛かり・繰り返し
- ✓ 紛失癖・世話の拒否
- ✓ 貯め込み etc.

Vitality Index 生活意欲

- ✓ 起床
- ✓ 意思疎通
- ✓ 食事
- ✓ 排泄
- ✓ リハビリ活動

<AIによるLIFEの拡張（案）>

ユーザが観測許容する活動に限定

ADL／BI

- ✓ 歩行の安定度・姿勢
- ✓ 階段昇降の安定度
- ✓ 移動距離
- ※ 3Dカメラで骨格の動き抽出

DBD13

- ✓ 生成AIとのクイズ応答
- ✓ 脳の活性度
- ✓ 論理的思考度
- ※ 楽しみながら予防的利用

Vitality Index

- ✓ 腕の上がる角度
- ✓ 手足の動作の機敏性
- ✓ 転倒防止のバランス性
- ※ リハビリ中の動作分析
楽しみながらユーザーも認識

<適用するAI（案）>

色々AIはあるが下記はサンプル

骨格抽出・動作分析AI

3Dカメラで骨格の動き抽出
手足・腕・首・姿勢を識別
移動角度・範囲・速度から
各種自立度を推定

会話型生成AI

生成AIとのチャットを通じて
ユーザーの反応を分析
好奇心・興味を惹いたり
会話の論理性を分析

表情抽出AI

顔の表示やまばたき頻度
などから脳の活性度分析
笑い顔などからリラックス度
推定 etc.

エンタープライズアーキテクチャ の考え方で、プロジェクトの構造を整理

ビジネス、業務プロセス、アプリケーションを統合的に俯瞰出来る！

ステークホルダー

WHY (ビジネス動機)

HOW (業務プロセス)

WHAT (アプリケーション)

価値のTranslation (翻訳)
KFS⇒KGI/ KPI①⇒②⇒③⇒④
それぞれの階層のステークホルダーが理解できる
言葉に翻訳、具体化していく

<凡例> 『AIプロジェクトマネージャのための機械学習工学』を参考

ビジネス層の要素	アプリケーション層の要素	動機拡張の要素
ビジネスアクター	アプリケーションサービス	ドライバ
ビジネスサービス	アプリケーション機能	ゴール
ビジネスプロセス	アプリケーションコンポーネント	アセスメント
ビジネスオブジェクト	データオブジェクト	

表記	関係名	意味
	Association	一般的な関係
	Realization	目的が手段により実現される関係
	Composition	上位が下位に分解される関係
	Influence	肯定または否定の影響の関係
	Access	データオブジェクトを操作する関係
	Assignment	割り当てられた実行する主体やアプリケーションコンポーネントを示す関係

WG 活動内容 (Working Group Activities)

WG1 PM4AI

【主な活動】

- ・ A I を適用したシステムの構築・運用のプロジェクトマネジメントに関する国内外の文献調査
- ・ A I を適用したシステムの構築・運用の各フェーズにおける課題の解決に関する研究
- ・ 日本の環境を考慮した A I を適用したシステムの構築・運用のガイドブックの作成

これらの活動を通して、A I を適用したシステムの構築・運用方法を確立するために活動しましょう。

- ・ [AI@Work Conference#7 AI導入プロジェクトから価値を引き出す実践手法 \(2024/11/2\)](#) **NEW**
- ・ [2024 Kick off \(2024/1/24\)](#)
- ・ [AI@Work Conference \(2022/3/26\)](#)
- ・ [2022 Kick off \(2022/1/24\)](#)

【プレイブック】

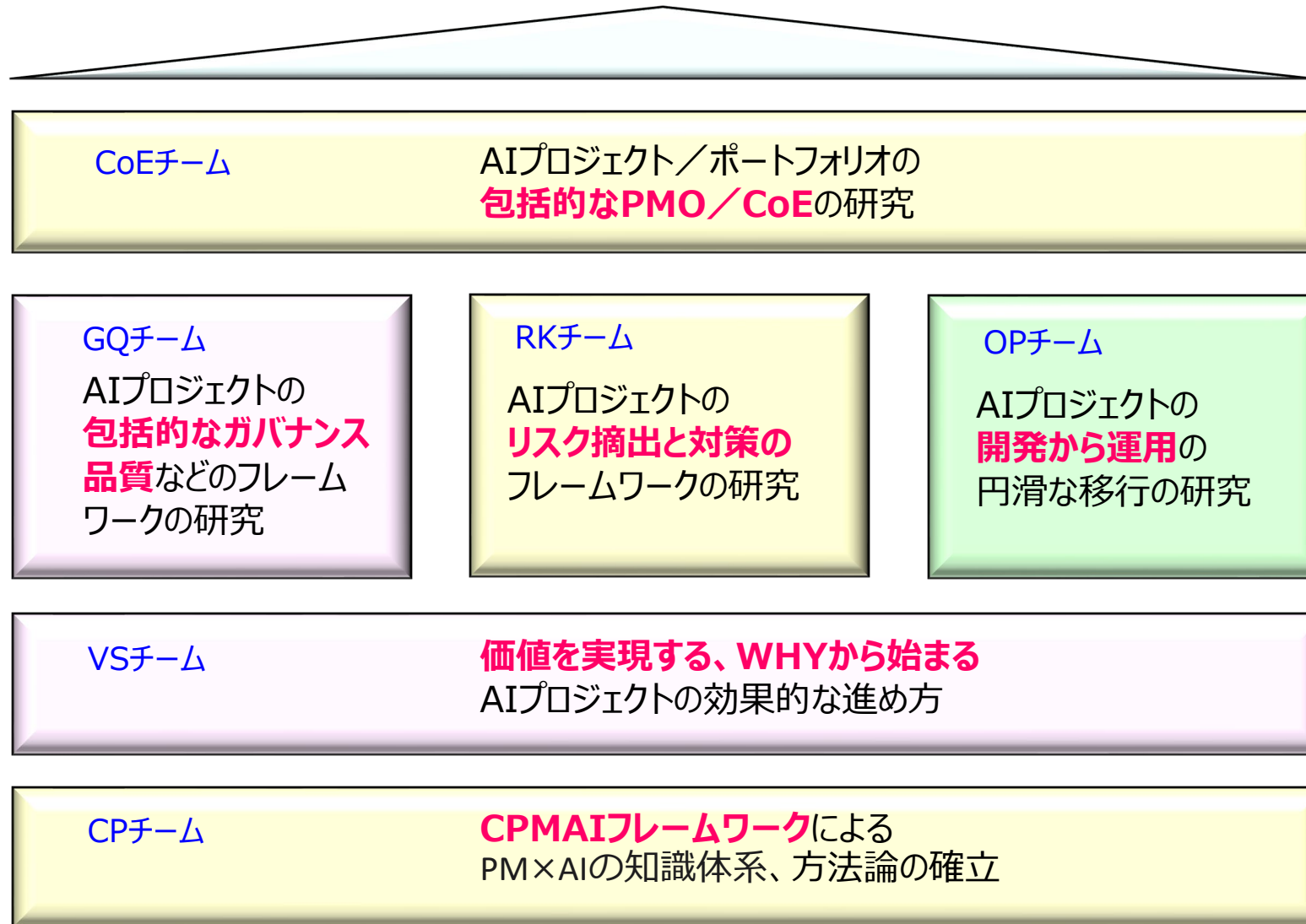
- ・ [Vol.1 プロジェクトマネジャーのための価値検討フェーズの進め方](#) **NEW**
- ・ [Vol.2 プロジェクトマネジャーのためのPrompt Engineeringの奨め](#) **NEW**
- ・ [Vol.3 プロジェクトマネジャーのためのRAGの活用](#) **NEW**
- ・ [Vol.4 プロジェクトマネジャーのための AI Driven によるPJ管理ツール開発①](#) **NEW**



2025年 WG1のチーム構成と 活動計画

2025年 WG 1 の活動のチーム構成

AI@WORKの活動も6年目に入り、
WG1全体でも面的なカバレッジを組織的に上げていきたい！
チーム間コラボ・クロスオーバー連携も活性化



凡例：

：継続
(D0⇒VS
D4⇒GQチーム)

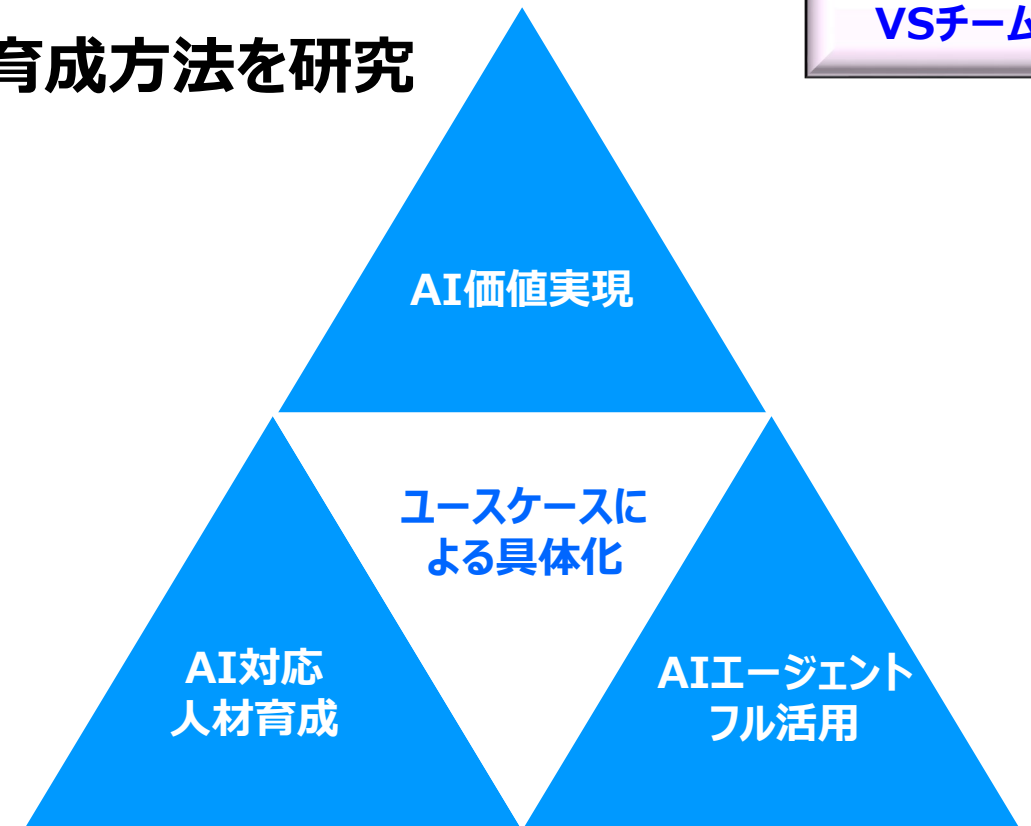
VS：Value and Success
GQ：Governance and Quality

：新規
※D3チームからリニューアル
Risk(RK)チームとして新スタート

：新規
※OPチームは2025年後半に
掛けて立上げを想定
(PMI日本支部のIT運用研究
チームにコラボご相談したい！)

OP：Operation

解決しようとする課題	① 中規模の企業でも、AIプロジェクトから価値を引き出して、成功に導く方法論 の研究 ② AI-Driven技術の急速な進化に追いつけない、対応可否で、社会の格差が広がることを防ぐ											
適用する手段	① WHYから始まるゴールデンサークルを基調としたユースケースベースでの方法論の具体化 ② AIマルチエージェント技術もTry & Go⇒経験が少なくてもAIプロジェクトを進められる 考え方・方法の研究											
実施計画	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	ユースケース研究②（LIFE） AIマルチエージェント活用検討						ユースケース研究③ ユースケース：中規模企業を救うロボティクス他を想定			ユースケース研究④		
	各種AIマルチエージェント技術の調査と、AIプロジェクトへの適用試行											
				PMI日本フォーラム発表準備				AI@Work Conference発表準備				
	プレイブック① Project Management Vs Product Management			プレイブック② HybridなAI開発PJの進め方			プレイブック③ AI Drivenな組織への変化の仕方					



- 1) ユースケース2で纏めたような『エンタープライズ』アーキテクチャのような俯瞰したものを**AIエージェント**を活用して効率的に作成する手法
- 2) このような複合的な**AIアーキテクチャ**を検討出来る人材、チーム、組織の作り方

⇒ **プレイブックとして纏めて行く**

解決しようとする課題	①AIプロジェクトが様々な社会的なインパクトを起こす時代に入っている ②ガバナンス・品質など、国際標準化、AI-ACTなどの規制へ対応も必要											
適用する手段	①グローバルの動向を調査して、我々もPMの観点でそれに対応してアクティブに行動する ②ユースケース（VSチームとコラボ）として介護ケアプロジェクトを取り上げ、具体的な課題・対策を研究する											
実施計画	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	ユースケース研究②（LIFE） D0チームとコラボで具体的なLIFE（介護ケアプロジェクト）で課題と対策を検討 PMI日本フォーラム発表準備											

合わせて各種品質データを基に、機械学習・生成AIツールで評価を試行

AIマネジメントの国際規格
ISO/IEC 42001

AIガバナンスの国際規格
ISO/IEC 38507

NIST/
AIリスクマネジメント
フレームワーク (AI RMF)

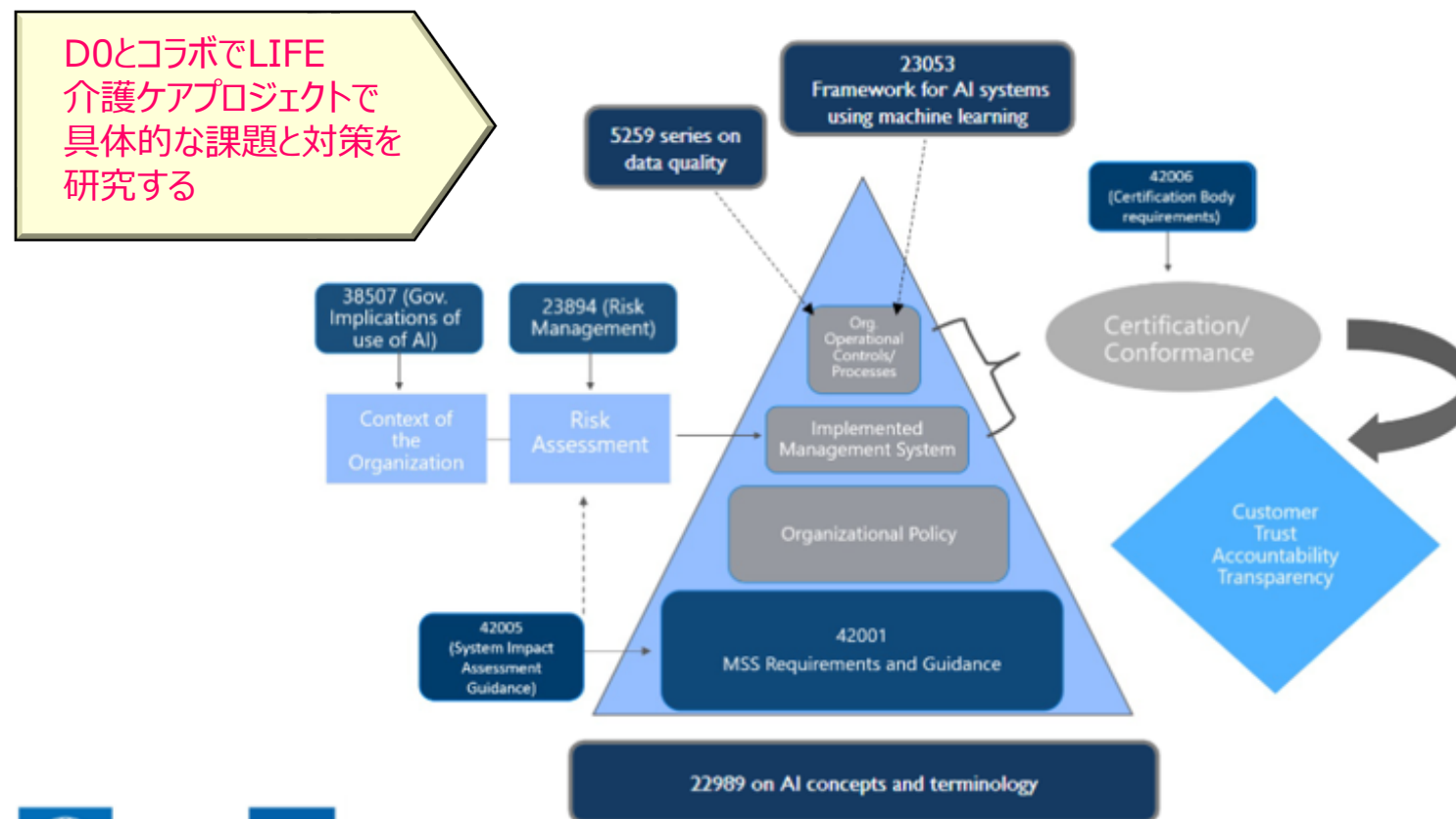
EU-ACT

Disciplined Agile
(要求仕様の調整)

総務省・経済産業省「AI事業
者ガイドライン」

Other supporting standards in the foundational ecosystem

D0とコラボでLIFE
介護ケアプロジェクトで
具体的な課題と対策を
研究する

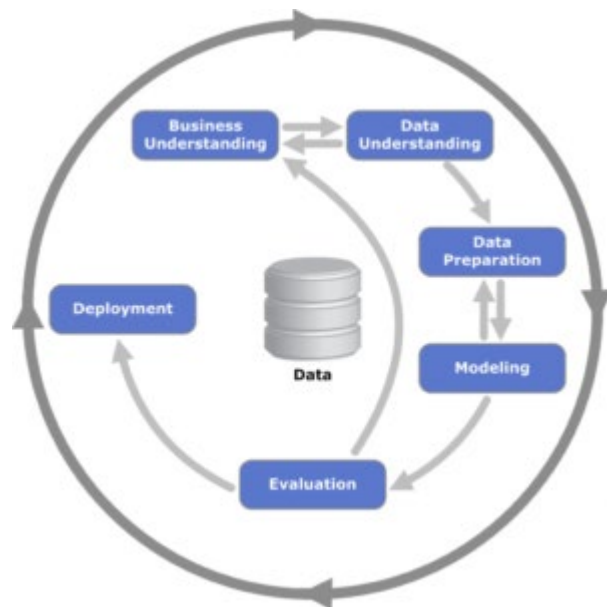


解決しようとする課題	①データDrivenで進むAIプロジェクトは、不定の項目が多い中で進める必要があり、従来手法では適応困難 ②逐次開発するアジャイルとデータサイエンス指向のCRISP/DMもAIのデータによる不確定性対応で完全ではない											
適用する手段	①Cognilytica が、何千もの AI プロジェクトの経験から、AI プロジェクトが失敗する主な 10 の理由を特定 ②アジャイルとデータサイエンス指向のCRISP/DMの長所を採り入れ、弱点を克服した手法を提供											
実施計画	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	Cognilyticaコース受講 資格取得と攻め方のポイントを整理							ユースケース研究で具体的な適用検討				
				AI@Work内で、Cognilyticaの水平展開方法を検討								
				PMI日本フォーラム発表準備				AI@Work Conference発表準備				
								プレイブック④ Cognilyticaの実際のPJへの 適用方法について（ユースケースベース）				

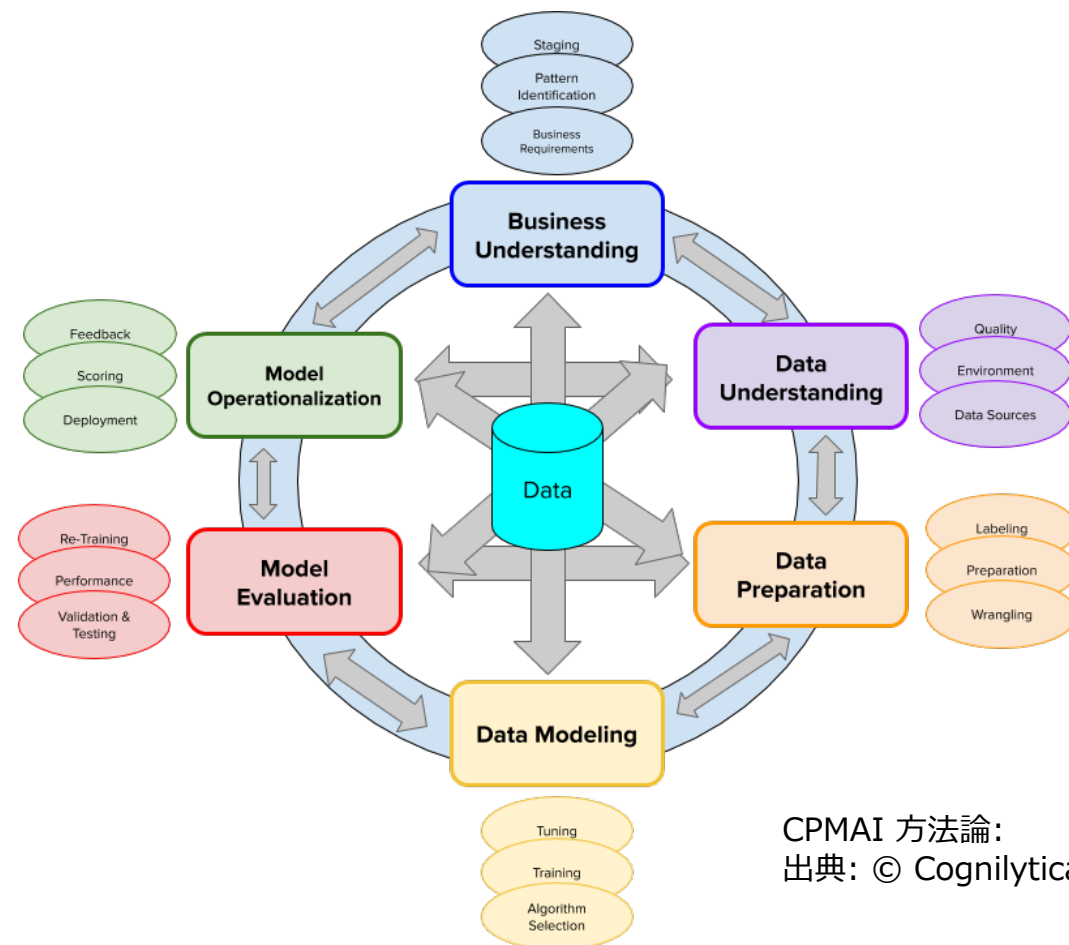
アジャイルとCRISP/DMの長所を採り入れ、弱点を克服した手法を提供

Cognilytica が、何千もの AI プロジェクトの経験から特定した、AI プロジェクトが失敗する主な10の理由

- ①データ中心のAIにアプリケーション開発アプローチを適用する
- ②十分な量のデータがない
- ③データの品質が不十分
- ④AIソリューションと問題とのROIの不一致
- ⑤継続的なAI、モデル、データの反復、ライフサイクルの計画の欠如
- ⑥実世界のデータとインタラクションとトレーニングデータおよびモデルの不一致
- ⑦概念実証の考え方を実際のパイロットに適用する
- ⑧AIプロジェクトのデータコンポーネントの時間とコストを過小評価する
- ⑨ベンダーの約束と現実の不一致
- ⑩AI の能力を過大に約束し、プロジェクトの成果が不十分



CRISP/DM



CPMAI 方法論:
出典: © Cognilytica

CPMAI は、認知プロジェクトを短縮し、スピードアップする方法として、Cognilytica の 7つの AI パターンを使用

CPMAI には 6 つの主要なフェーズがあり、すべて反復的でデータ中心

CPMAI フェーズ I: ビジネスの理解

- 「ビジネス上の問題を AI ソリューションにマッピングする」

CPMAI フェーズ II: データの理解

- 「問題に対処するために適切なデータを入手する」

CPMAI フェーズ III: データ準備

- 「データ中心の AI プロジェクトで使用するためにデータを準備する」

CPMAI フェーズ IV: モデル開発

- 「ビジネスの問題に対処する AI ソリューションの作成」

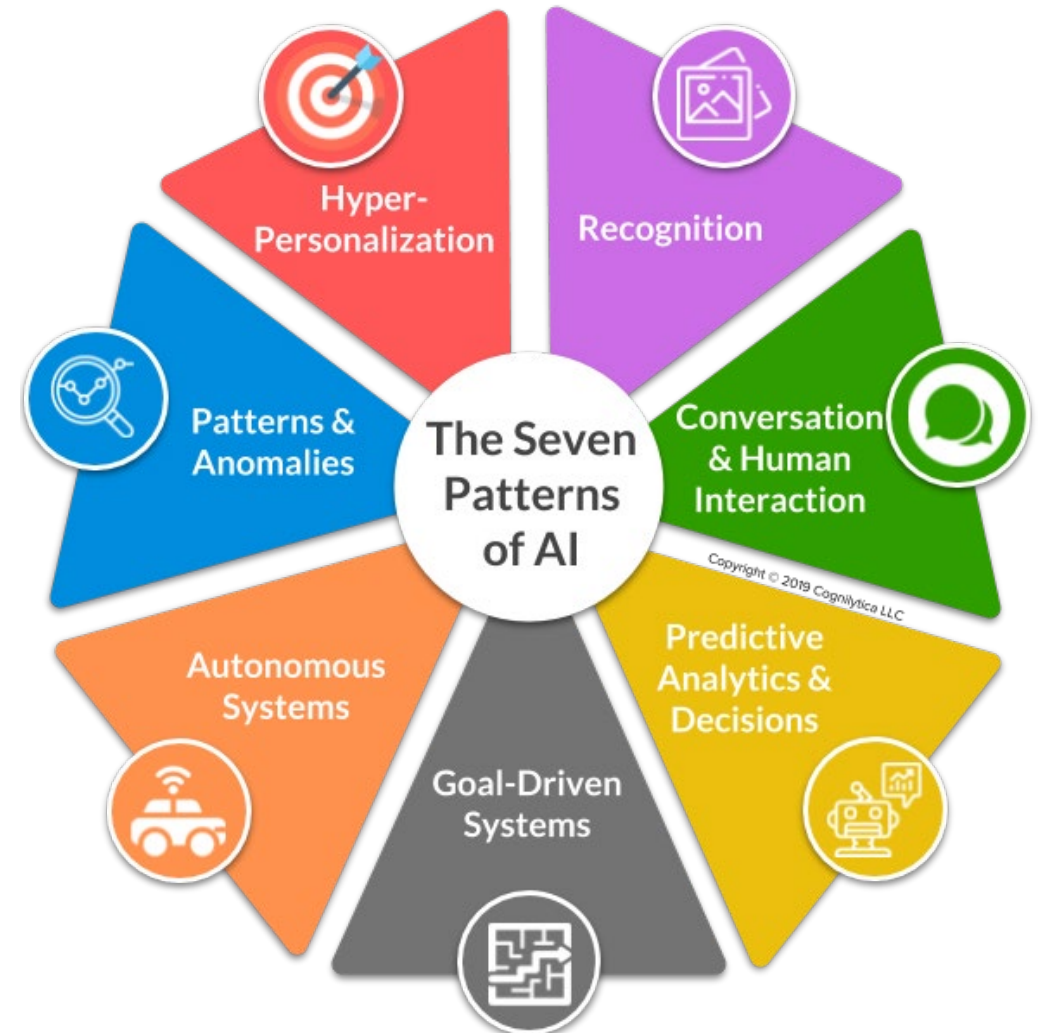
CPMAI フェーズ V: モデル評価

- 「AI ソリューションが現実世界とビジネスのニーズを満たしているかどうかを判断します。」

CPMAI フェーズ VI: モデルの運用化

- 「AI ソリューションを現実世界で活用し、反復して価値を提供し続ける」

適用するAIプロジェクトが、Cognilyticaの7つのパターンのどれに該当するかを識別することで、無駄なく迅速に最適な手法を選択できる。



解決しようとする課題	①AIプロジェクトでは、開発から運用まで、組織を横断する俯瞰した組織が必要 ②組織のナレッジをマネジメントして、戦略的に行動して、必要なら幹部に物申す役割が不可欠											
適用する手段	①PMIから“PMO TIP GUIDE”が発行されており、AI対応プロジェクトのPMO（= CoE）の役割が参考になる ②AI対応プロジェクトで必須なCoE機能を整理して、AI@Work内で咀嚼、プレイブックを発行											
実施計画	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	PMO TIP GUIDEを読み込む AIプロジェクトに必要なポイントを整理						ユースケース研究で具体的な適用検討					
	AI@Work内で、戦略的にPMO = （CoE）の組織立上げ、機能化を議論											
	※参考：PMIからPMOのPracticeガイドが3月中に発行予定 （発行されたら内容を確認して、必要項目を反映） AI@Work Conference発表準備 プレイブック⑤ AI対応プロジェクトにおける戦略的PMO = CoEの立ち上げ方と機能化について											

AIプロジェクトの観点では、少なくとも2つの考え方のPMOが必要！

個々のプロジェクトに
従属する形のPMO

非AIの従来型の
プロジェクト（PJ）では、
記録・マネジメントなど
の役割で存在した

AI対応PJではナレッジ
マネジメントが
不可欠

このタイプのPMOで
あっても、生成AIなど
AI-DrivenでPJを
効率的に運用する
ノウハウは必須になる！

CAPABILITIES	PMOの種類				
	組織単位 PMO	プロジェクト/ プログラム 固有	プロジェクト サポート/サービ スPMO	エンター プライズ PMO	センターオブ エクセレンス
	標準、方法論、プロセス	●	●	●	●
	プロジェクト/プログラムデリバリー管理	●	●	■	■
	ポートフォリオ管理	●	▲	●	●
	タレントマネジメント	■	■	●	●
	ガバナンス/パフォーマンス/利益実現 管理	■	■	●	●
	組織変更管理	■	■	●	●
	管理とサポート	■	●	■	■
	ナレッジマネジメント	■	▲	●	●
	戦略計画	■	■	●	●
要件		● クリティカル	■ 中程度に重要	▲ 時々必要	

CoE（センターオブエクセレンス）

AI対応PJでは、この
2つのタイプのPMO
が求められる

組織横断で開発・
運用チームの相互
連携をはかったり、
人材の融通、事例の
水平展開などを
カバーする

AI対応PJでは、
組織のナレッジマネ
ジメントが不可欠
また戦略計画も
必須である

すなわちPMO = CoE
で必要なら幹部にも
物申す存在である
べき

表 1 PMO の種類と機能

注）CoE（センターオブエクセレンス）や、PMOの用語の定義には様々な解釈があるようなので、AI@Work内でまず定義を合わせる必要あり

解決しようとする課題	①AIプロジェクトのリスクの考え方は、AIそのものの急速な発展により、FIXした考え方がある訳ではない ②生成AIによるハルシネーション、著作権侵害が問題であったが、AGIが見えて来ると制御、ガバナンスリスク対策が重要											
適用する手段	①MITから777種類にわたるAIRiskがリポジトリ化されて発行されており、発生カテゴリが考え方として参考になる ②またAIRiskがAI起因／人間起因、発生タイミング：デプロイ前／後なども1次レポートが出ており、考慮が必要！											
実施計画	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	MITリスクリポジトリの調査			ユースケース研究で具体的な適用検討								
	AIプロジェクトで考慮必要なRiskの考え方を整理											
	AI@Work内で、戦略的なAIRiskへの対応検討の道筋をディスカッション											
	AI@Work Conference発表準備											
	プレイブック⑥ AI対応プロジェクトにおけるRisk対策でPM、PMOが知っておくべき事と対応策											

MITから777種類のAIのリスクがリポジトリ化されている！

The AI Risk Repository: A Comprehensive Meta-Review, Database, and Taxonomy of Risks From Artificial Intelligence

Peter Slattery^{1,2}, Alexander K. Saeri^{1,2}, Emily A. C. Grundy^{1,2}, Jess Graham³, Michael Noetel^{2,3}, Risto Uuk^{4,5}, James Dao⁶, Soroush Pour⁶, Stephen Casper⁷, and Neil Thompson¹.

¹MIT FutureTech, Massachusetts Institute of Technology, ²Ready Research, ³School of Psychology, The University of Queensland, ⁴Future of Life Institute, ⁵KU Leuven, ⁶Harmony Intelligence, ⁷Computer Science and Artificial Intelligence Laboratory, Massachusetts Institute of Technology.

Correspondence to pslat@mit.edu.

Abstract

The risks posed by Artificial Intelligence (AI) are of considerable concern to academics, auditors, policymakers, AI companies, and the public. However, a lack of shared understanding of AI risks can impede our ability to comprehensively discuss, research, and react to them. This paper addresses this gap by creating an AI Risk Repository to serve as a common frame of reference. This comprises a living database of 777 risks extracted from 43 taxonomies, which can be filtered based on two overarching taxonomies and easily accessed, modified, and updated via our [website](#) and [online spreadsheets](#). We construct our Repository with a systematic review of taxonomies and other structured classifications of AI risk followed by an expert consultation. We develop our taxonomies of AI risk using a best-fit framework synthesis. Our high-level Causal Taxonomy of AI Risks classifies each risk by its causal factors (1) Entity: Human, AI; (2) Intentionality: Intentional, Unintentional; and (3) Timing: Pre-deployment, Post-deployment. Our mid-level Domain Taxonomy of AI Risks classifies risks into seven AI risk domains: (1) Discrimination & toxicity, (2) Privacy & security, (3) Misinformation, (4) Malicious actors & misuse, (5) Human-computer interaction, (6) Socioeconomic & environmental, and (7) AI system safety, failures, & limitations. These are further divided into 23 subdomains. The AI Risk Repository is, to our knowledge, the first attempt to rigorously curate, analyze, and extract AI risk frameworks into a publicly accessible, comprehensive, extensible, and categorized risk database. This creates a foundation for a more coordinated, coherent, and complete approach to defining, auditing, and managing the risks posed by AI systems.

<https://airisk.mit.edu/#Repository-Overview>

発見したこと

表Cに示されているように、リスクのほとんど（51％）は、人間（34％）ではなくAIシステムによって引き起こされると提示され、AIモデルのトレーニングと展開前（10％）ではなく後に発生する（65％）と提示されました。同様の割合のリスクが、意図的（35％）と意図的でない（37％）として提示されました。

Table C. 因果関係の分類法でコード化された AI リスク データベース: エンティティ、意図、タイミング

Category	Level	Proportion
Entity	人間	34%
	AI	51%
	Other	15%
Intent	意図的である	35%
	意図的でない	37%
	Other	27%
Timing	デプロイ前	10%
	デプロイ後	65%
	Other	24%

MITのリポジトリは今後も変化、新規に発生するリスクが逐次追加、更新される柔軟な構造になっている。

興味深いことに、AIによって引き起こされる割合はほとんどAIそのものであったり、デプロイ後に発生することが分かる。

したがって我々はデプロイ前では未定でも、その後発生するリスクに備える必要がある

解決しようとする課題	①AIプロジェクトは、開発から運用フェーズへのスムーズな移行が必要。一方データは運用段階で変遷する ②日本企業の大多数は、開発終了とともに、開発チームから運用チームへ引き渡して別開発にチームはシフトする											
適用する手段	①モダンプロジェクトライフサイクル（P.33）を意識して、プロジェクト計画を立てる必要がある ②そのために開発チームと運用チームのコラボ、人材交流をはかって、運用チームもAIのCI/CD（P.35）に対応要											
実施計画	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

開発から運用までシームレスに対応可能な組織作りの検討

PMI日本支部内で、IT運用を考えるチームとコラボ・AIプロジェクト対応を議論

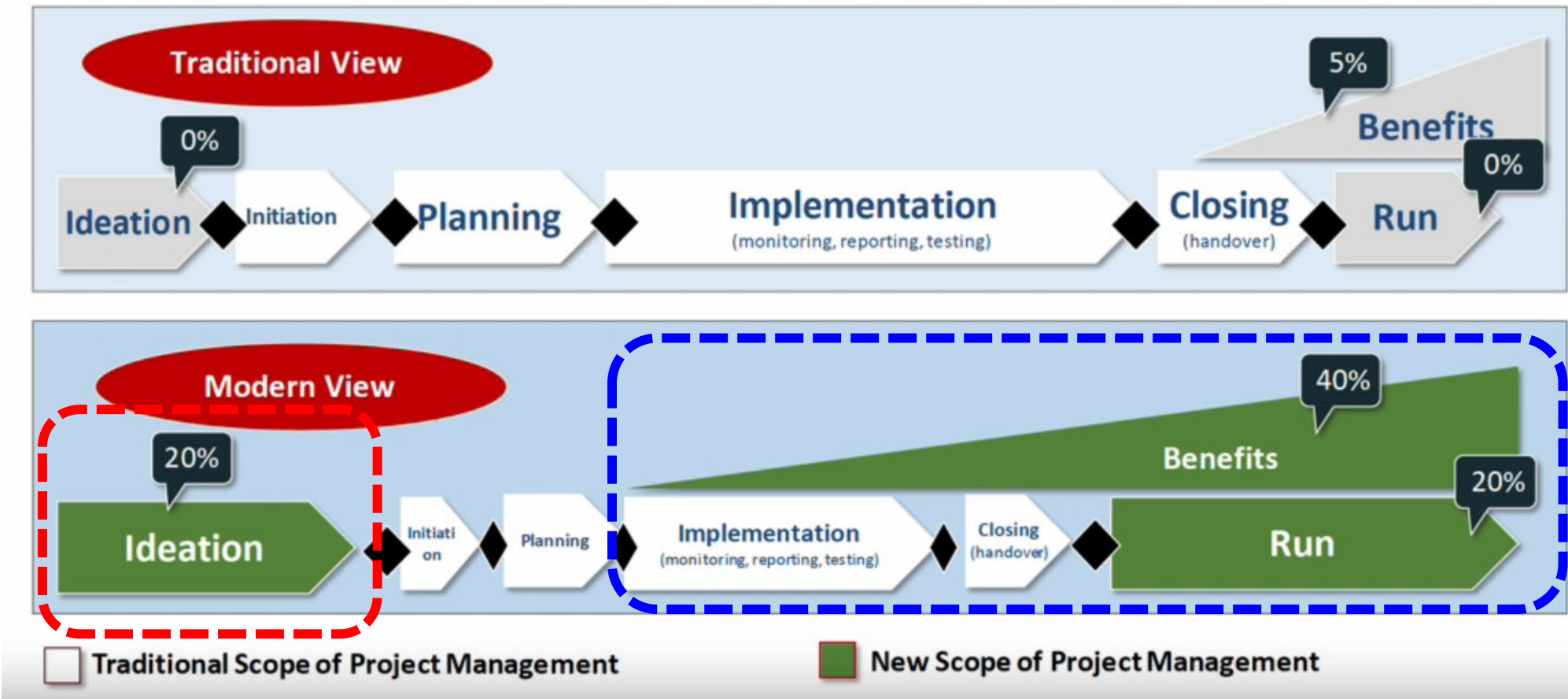
プレイブック⑥
AI対応プロジェクトにおける開発から運用の流れで
必要な課題と対応策

AIプロジェクトでは特に開発段階から運用チームとのコラボ準備が不可欠！

特に『Ideation』（アイデアを纏めるところ） のフェーズの重要性が大きく増してくる
『Implementation』（実装）の段階から、走りながら利益を獲得、『Run』のフェーズ へシームレスに拡張していく

an Antonio Nieto-Rodriguez

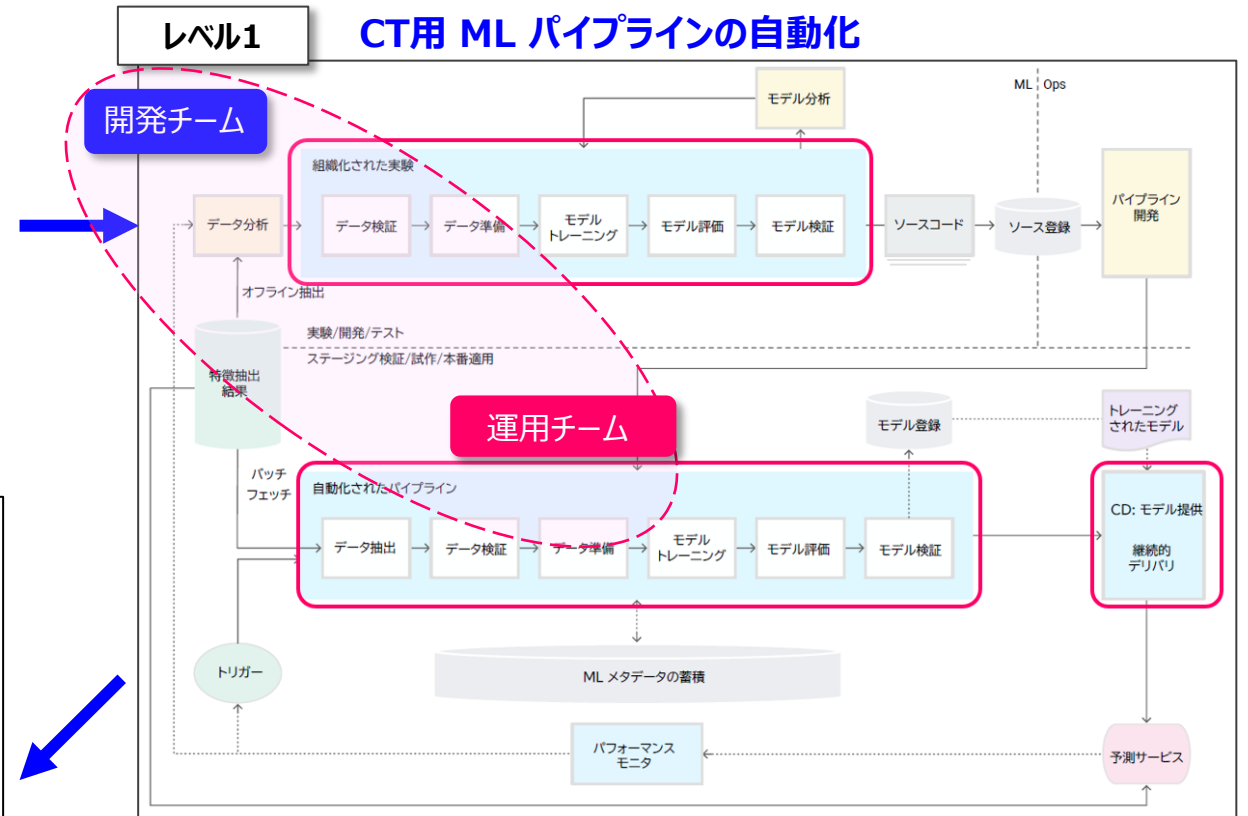
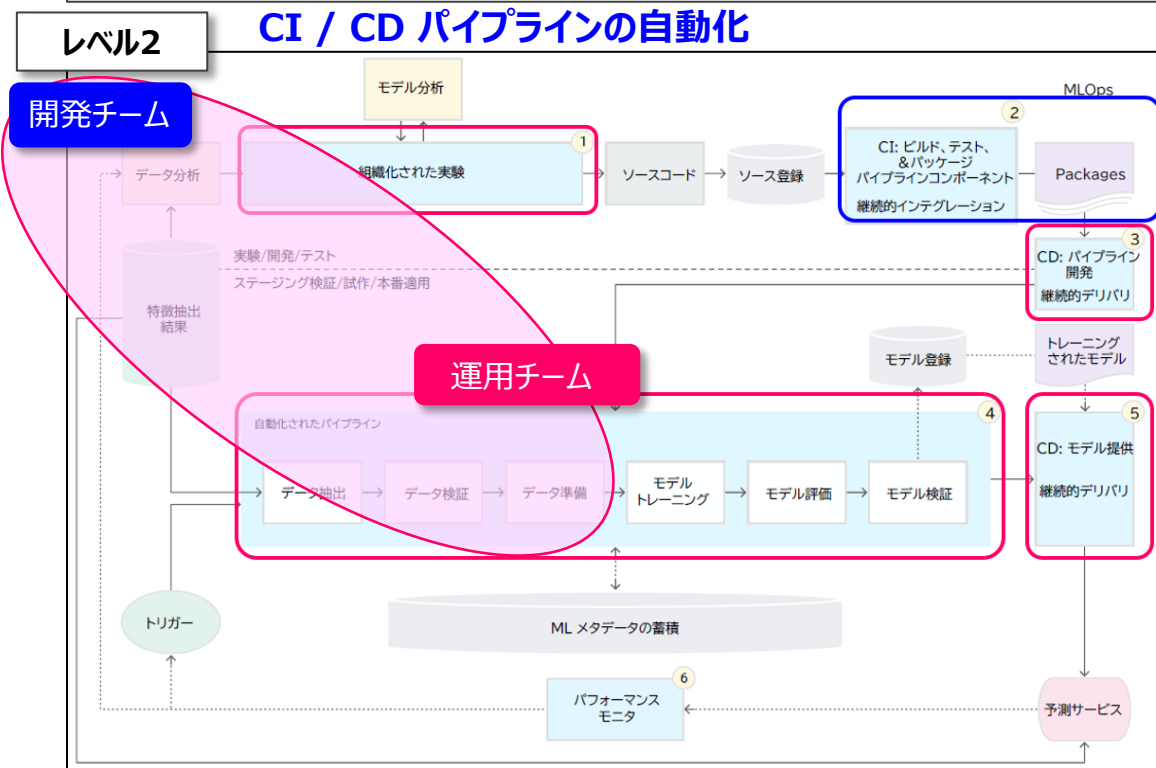
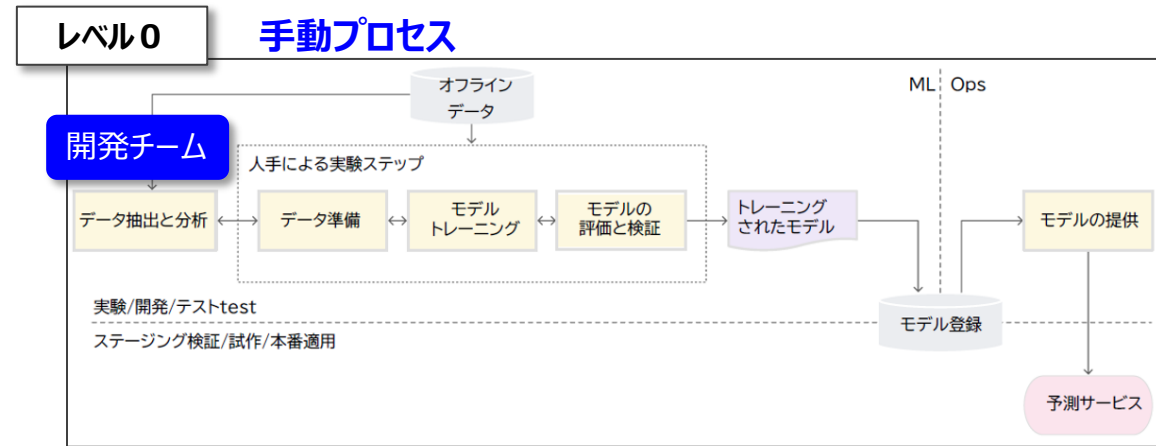
Modern Project Life Cycle



～ RicardoとAntonioのAI-Driven Project Management Revolutionより ～

Googleの開発体制の例

あらかじめ下記のような開発チームと運用チームのコラボを体制で考慮要



レベル0 ⇒ 1 ⇒ 2 と進化するとともに、開発チームと運用チームの密連携が不可欠になってくる

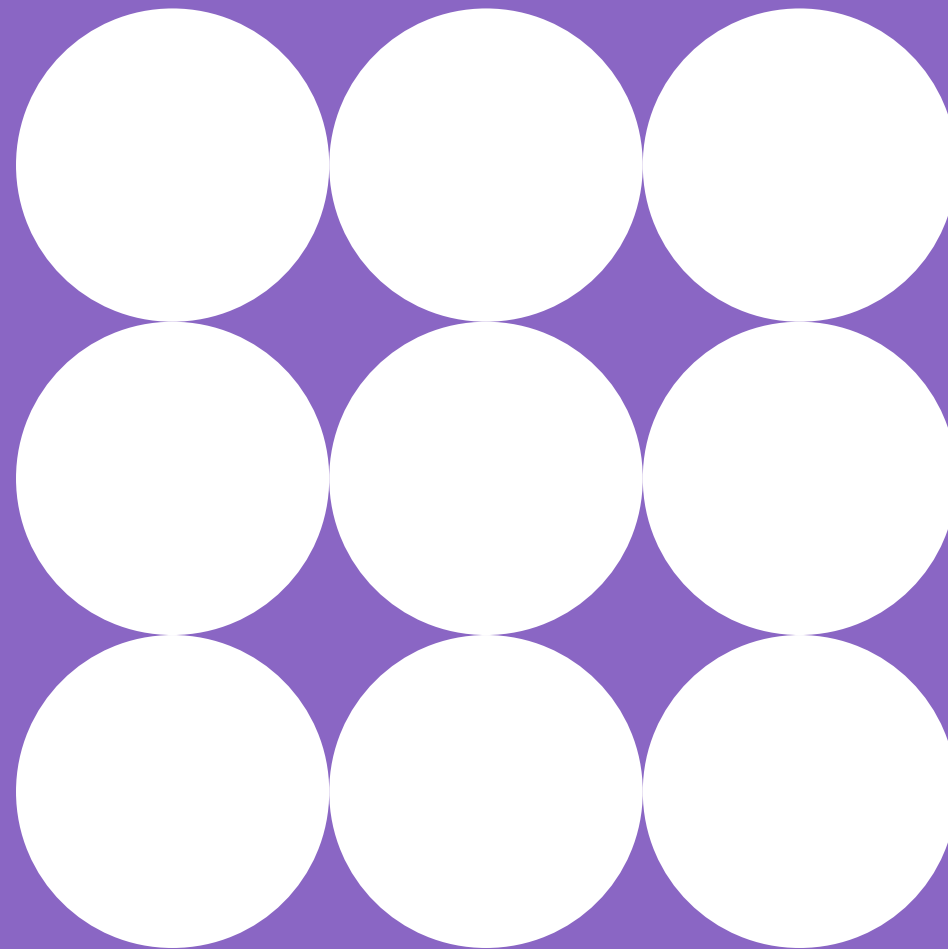
⇒ 親密度（連携度）が AI組織の成熟度を表す

<https://cloud.google.com/architecture/mlops-continuous-delivery-and-automation-pipelines-in-machine-learning> を参照

まとめ

- ①これからのプロジェクトには確実に**AIが使われるシーン**が多くなります
- ②私達は、**PM×AI**の領域を**多面的な観点で成功に導く手法**を研究しています

国内外の**先進的な事例や、基礎的なこと**を学びたい方、**この今最もホットな領域を一緒に探検してみませんか♪**



本資料および動画の著作権について

本資料および動画の著作権は、PMI日本支部に帰属しています。

本資料および動画の一部または全部を著作権者に無許可で複製、転載、公衆送信、口述、上映、出版、頒布、貸与、編集するなどして使用することは著作権法に反することとなります。